

井上宗雄
編
大取一馬

中世百首歌

四

古典文庫

井上宗雄 編
大取一馬

中世百首歌

四

古典文庫第四六五冊

昭和六十年七月二十日印刷発行

非売品

編者

井上宗雄
大取一馬

発行者

吉田幸一

歌首百世中
四

印刷者

白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

一	藤原資広百首詠歌……………	七
二	夏日陪 浅間宮宝前詠百首和歌（今川範政 その一）……………	一九
三	夏日陪 惣社宝前詠百首和歌（今川範政 その二）……………	三七
四	百首和歌（冷泉持和）……………	五七
五	詠百首和哥（道興 その一）……………	七七
六	詠百首和歌（道興 その二）……………	九五
七	詠百首和歌（釈忍誓）……………	一二五
八	詠八月十五夜百首和歌（持教）……………	一三七

九	詠百首和歌（徳大寺実淳）	一五七
一〇	〔安宅冬康百首〕	一七七
二	〔光闡百首〕（顯誓）	一九五
三	詠百首和歌（木食応其）	二三七
	解題	二三九
	『中世百首歌（三）』補訂	二七七
	初句索引	二七九

凡 例

一、「中世百首和歌」は次の要領によって翻刻刊行する。

- (1) 平安末期から江戸ごく初期（慶長頃）までの個人百首を原則とする。
- (2) 比較的披見・入手しやすい左記叢書所収のものを除く。

群書類従（正統） 私家集大成

但し右所収の百首でも、異本関係にあるもの、また右所収の百首が必ずしも善本でなく、他に善本（原本・古写本等）の類がある場合は収める。

- (3) ある契機によって複数歌人がそれぞれ百首歌を詠じ、それが一括されて定数歌集となっている場合（例えば正治百首・嘉元百首の類、或は着到歌会歌集など）、また形態的に百首歌でないもの（例えば個人百首を基にして成立した千五百番歌合など）は除くが、その中の個人百首が独立した伝本として存し、かつそれが善本・異本（原本・草稿本・完成本の

類）であるような場合は収める。

- (4) 定数歌が私家集の一部であるもの（私家集の、ある部分が部類または編年体で、その中途や前後に百首があるものなど。例えば明日香井和歌集・拾遺愚草・草根集など）は除くが、百首歌が集積されて家集となっている場合で、(2)に未収のものは収める。

- (5) 偽書・仮托と目せられる百首（例えば鷹百首の類）は、伝称作者のものとしては扱わず、中世成立分明なものについては、別途に将来の課題として考え、ここでは一応除いておく。

- (6) 以下、同じ流派の人々や、ほぼ同時期の百首をまとめて一冊として刊行する。本冊には主として室町中・末期のものを収めた。但し「一 藤原資広百首詠歌」のみは南北朝期のものと思われるが、これを収めた事情は解題を参照されたい。

二、翻刻は次の方針で行った。

- (1) 漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名などはすべて底本のままとした

が、漢字は原則として現行漢字に、変体仮名は通行の字体に改めた。

(2) 私注はすべて（ ）に入れて示した。

(3) 底本で一首が二行書きの場合は、歌の上・下句の間を一字あきとした。

(4) 十二の百首歌をほぼ成立順に配列し、一つの百首ごとに漢数字で番号を与え、それぞれに歌番号を算用数字で施した。

(5) 「藤原資広百首詠歌」・忍誓の「詠百首和歌」・持教の「詠八月十五夜百首和歌」は書陵部本を、持和の「百首和歌」・道興の二種の「詠百首和歌」は高松宮本を、実淳の「詠百首和歌」は谷山茂氏本を、応其の「詠百首和歌」は中興山普門院応其寺本を、範政の二種の「詠百首和歌」は天理図書館本を、「安宅冬康百首」は宮城県図書館伊達文庫本を、「光闡百首」は竜谷大学図書館本を底本とした。翻刻を許可された宮内庁書陵部・高松宮家・谷山茂氏・中興山普門院応其寺・天理図書館（翻刻番号第三四一・三四二号）・宮城県図書館・竜谷大学図書館、並びに上記各館等の職員の方々に厚く御礼申上げる。また翻刻に当たってさまざま

な御教示を受け、また御便宜をはかって下さった稲田利徳・日下幸男・谷山茂・樋口芳麻呂・松井隆性・松野陽一・三浦三夫・部矢敏三の各氏に厚く御礼申上げる。

(6) 本書の性質上、校異を詳しく加えることはしなかったが、底本の不備・誤脱および他本によって大きく意味が変る所に限り、他に校合すべき伝本のある場合は、それによって校異を加えた。校合に用いた本、校異のつけ方は、それぞれの解題を参照されたい。

三、解題は基本的な事項を記すに止めた。

四、初句索引を添えたが、索引の冒頭に凡例を記したので参照されたい。

昭和六十年四月

井上宗雄
大取一馬

一 藤原資広百首詠歌

藤原資広百首詠歌

尾藤弾正左衛門尉

春二十首

- 1 かすむとはさたかならねと今朝よりやはるたつ色の空にみゆらん
- 2 あけもあへすみ山の朝戸春さむし松の雪よりおろすあらしに
- 3 あとかへてほかの若菜やたつねましゆきふむ野辺はひとそつむらん
- 4 梅か香をうつすたもとのはるかせに花をおる名やあたに立なむ
- 5 ふかくなる霞のうちは見えわかつて入日のあとそ松ものこらぬ
- 6 はるの日の影さす程はゆきとけてくるれはのきにこほる玉水
- 7 それそとも見えぬやけふの若草にましろもしろき野辺のさわらひ
- 8 いつかたの雲ちに雁のかへるやまこし秋よりも数そすくなき
- 9 ちるわかれうきにこりすやことし又物わすれして花をまつらん

- 10 すむ人や山をいつらしまたさかぬ 花のさかりをおくにのこして
11 おる人に所をそとふみやま路や いまたまれなる花をたつねて
12 さそふへき風はわすれてみぬ人の たつねもこはとおらぬ花かな
13 のとかなる世ははるの日にさきそめて 花もひかりやひさしかるらん
14 山ふかきわか庭まではとひもこす はなのなさけも人をわきけり
15 さきこむる花はあらしに散そめて かつあらはるゝ松の色かな
16 吹かせはおのへの松にとゝまりて ふもとの花は心とそちる
17 ふりよはる雲のとたえもかすみにて はるゝもくもる春雨のそら
18 かすむかとおもふ夕へやくもりけん 窓にをときくよ半のはるさめ
19 風かよふ木すゑに藤やかゝるらん 花にこもれる松のをとかな
20 松かえにうつりあまりてまとちかき 竹までかゝる宿のふちなみ

夏十五首

- 21 さためてはたれしもきかしほとゝきす そのたのみより猶そまたるゝ

- 22 ほとゝきすなかぬ年そとおもひなせ 心つくさぬはつねもそぎく
23 たつね入て山ちはくれぬほとゝきす たひねことゝふ一声もかな
24 人つては中／＼きかしほとゝきす はつねにもるゝ身としるもうし
25 おなしねのさとをすてすはほとゝきす たかねさめをか今はとふらん
26 月をみるおなし夜ころのほとゝきす またてや人のはつねきくらん
27 まちわひてねぬ人はかりきけとてや やまほとゝきすふけてなくらん
28 こよひするあやめの枕にほふらし なれぬたもとの今朝のうつり香
29 くらき身をすゝめかほなるほたる哉 よな／＼おなし窓にすたきて
30 夏草のなひかぬ方やゆく人の すゑわけのこす野原なるらん
31 庭もはやふかくしければなつくさに ましての原そ路たえにける
32 あけやすきならひと許きくかねの をとよりも猶月そひさしき
33 ふけぬるかいまやと鹿をまつ火も きえかたちかく夜は成にけり
34 雲ふかき空のけしきははやくれて 入あひをそし五月雨のころ

35 しけりあふ木の下まではすゝしくて 日影になれはぬるきやま水

秋二十首

36 風のをとよの間の空にふきかへて 涙しくるゝ秋はきにけり

37 きゝなるゝ軒はのおきに吹かせの あはれもおなし秋のゆふくれ

38 なれて後はきかぬもさひしおきのはに をとつれよはる庭の秋かせ

39 今は又はなのかきとそ成にける しめゆふ庭の秋のはき原

40 日の影のかたふく草のゆふ露に 籬のむしや鳴はしむらん

41 うれへなき人のためにはあきの夜の なかきはかりやおもひなるらん

42 袖にふくゆふへの風の身にしめは 月をもまたてうつころも哉

43 ふけぬとて月にひゝきのうちやめは 人のゆめまできくきぬたかな

44 ふかねとも風のすかたをかるかやの なひくをみれは露にそありける

45 をしかたつ野へのはき原打なひき 風をもまたて露やちるらん

46 ふみしたく岡のくすはらかせたちて 又跡かくす鹿のかよひち

47 山田もるたもとやこよひほしつらん いな葉の露をはらふ秋かせ
48 吹なれて草木にかはるをとほあれと すこきをきかぬ秋かせはなし
49 山のはをかへても出はよ半の月 くらきまとも影やたのまん
50 ふけすみておなし心にみる人を ひとりになさぬ月の影かな
51 西になる影こそみえねをくらやま 月は空よりきりにこもりて
52 なかめつゝふけぬとおもふ月影の 西にならぬや有曙の空
53 秋の雨のそむるはおなしもみちに 昨日の松そ又のこりぬる
54 松の葉はこすゑまでこそましりけれ ちるもみちにはそふ色もなし
55 たかやとも秋のあはれやつきぬらん おなし声きく入あひのかね

冬十五首

56 ちりのこる紅葉をさそふ木からしや 冬もしくれぬ秋をみすらん
57 木の葉をもさそひつくして冬かれに をとのみのこる風のさひしさ
58 風さむみくもはやく行ゆふくれは ふらぬくもりも外やしくるゝ

- 59 今みれは霜をくのへのをさゝはら かれぬ色には一村もなし
- 60 さむしとてみる人なくはわれのみや 霜夜の月の友となるらん
- 61 すゑとをき浦のひかたをさすしほに きゆるきはなき月の霜かな
- 62 霜はらふかもの羽かせのさむければ みきはの水やまつこほるらん
- 63 あしの葉の冬かれさむくをく霜を はらふもさむき浦のしほかせ
- 64 しくれつるなこりの雲の入山や 雪けの空にさえはしむらん
- 65 風にきく松のひゝきもうつもれて ゆふへの雪そしつかにはなる
- 66 竹の葉のなひくにおちぬしら露や こほりてとまるしつくなるらん
- 67 田にそみ^{本ノマ}とりの色ものこりける 雪には松のつれなさもなし
- 68 はつせ山おのへの雪はふかけれと うつもれもせぬかねのをと哉
- 69 山人のかよふそとものみちのみや とはれぬ雪に跡をみるらん
- 70 かへりつる跡をうつみてふる雪に とはれぬ庭と又成にけり

恋十五首